

始まりのブザーが鳴るまで問題冊子、解答用紙に手を触れずに、

左記の注意事項に目を通しておくこと。

- ◎ 問題用紙は1ページから16ページまでであるので、始まりのブザーが鳴ったらすぐに確認すること。
- ◎ 最初に記名をしてから問題を解くこと。
- ◎ 解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。
- ◎ とじてある問題用紙をばらにしたり、一部を切り取ったりしないこと。
- ◎ 終了のブザーが鳴ったら筆記用具を置くこと。
- ◎ 問題冊子は持ち帰ってもかまわない。

◎ 選択肢のある設問は、最も適当なものを選んでその番号を記すこと。

◎ 字数指定のある設問は、句読点や記号も一字とする。

【一】 次の文章を読み、後の問に答えよ。

見田宗介によれば、日本において社会共通の価値観が壊れはじめたのは一九七〇年代以降であり、以後、「虚構の時代」と呼ぶのがふさわしいような新しい時代に突入する。それは「関係の、最も基底の部分自体が、『わざわざするもの』、演技として、虚構として感覚される」時代である、と見田は言う。たとえば親子や夫婦といった関係も、親として、子として、夫として、妻として、各々が自分の役割を演技として感じている。^①どこか現実ではない虚構として感覚されている。

東浩紀はこうした「虚構の時代」について、「大きな物語がフェイクとしてしか機能しない時代」だと指摘している。

「大きな物語」とは宗教やイデオロギーなど、個人が生きる意味を見出すための社会共通の価値観であり、たとえばキリスト教が強い影響力を持つ社会では、神への信仰を示す行為や生き方こそ、その人の生の意味を決定するし、共産主義の国家では、国家に忠誠を示す行為こそが賞賛され、その価値を認められるだろう。

しかし、こうした「大きな物語」が信用を失い、社会共通の価値観がゆらいだとき、私たちは何をすれば社会に認められるのか、そして生きる意味を見出すことができるのか、その規準を見失ってしまう。そのため、「大きな物語」のフェイク（偽物）を無自覚のうちに捏造^aし、それを信じようとするので、かろうじて生きる意味を見出そうとする。家族が各々の役割を演じるのも、一方では家族の理想像を見失っているにもかかわらず、幸せな家族の像をあえて信じようとしなければ、自分の居場所を見出せないからなのだ。

このように、信じるべき価値を持たないからこそ、形式だけでも信じるふりをしてしまう精神、これを哲学者のスラヴォイ・ジジエクはシニシズムと呼んでいる。

たとえばナチズムやスターリニズムといった二十世紀のイデオロギースウハイ^bの根底にあるのは、こうした意味でのシニシズムである

という。民衆はそれを本気で信じていたわけではなく、ただ形式的に信じるふりをしていたにすぎない。「ふりをしていた」と言っても、自覚的に演技していたわけではない。自分がそうした思想を信じていることに対して、意識の上で疑念はないのだが、しかし心のどこかで疑っているため、自分の態度にどこか「わざとらしさ」を感じてしまうのだ。

「シニカルな主体は、イデオロギーの仮面と社会的現実との間の距離をちゃんと知っているが、それにもかかわらず仮面に執着する」。ジジエクによれば、これは「王様は裸だ」と知っているながら知らないふりをしていた、あの②における民衆たちと同じなのである。しかし、こうしたシニシズムの時代は終わりに近づいている、と東浩紀は主張する。もはや意味への渴望を人間関係のなかで満たすことはできず、他者の承認を求めるともなく、自分だけで欲求を満たすしか道はない。そして東浩紀はこのような変化を「動物化」③と呼んでいる。

だが、はたしてそうだろうか。確かに人間は他者の承認ばかりを求めているわけではないし、単独で欲求を満たす可能性もあるかもしれない。「他者の承認など必要ない」と主張する人間も、決して少ないわけではない。しかしそれでも、他者の承認は自分の存在価値に関わる、最も人間的な欲望であり、長期にわたってそれなしに生きていける人間はほとんどいないだろう。

△ A V 現代の日本社会では、社会共通の大きな価値観に対する信頼はゆらいでいる。だからといって、他者の承認を求めないような、自分一人で動物的に欲求を満たす人々が多数派を占めているわけではない。大多数の人間は現在もなお、身近な人間関係や小集団のなかで承認を求めている。そのため、学校や職場、趣味の共同体など、自分が属する集団において共有された価値観を重視し、その価値観に準じた言動を心がけている。

小集団ごとに異なった価値観が信じられているとしても、集団内で共有された価値観は、集団に属する者として承認されるための参照枠として機能する。食品の研究所では新食品の開発が、サッカーの部活動ではチームワークや高度なプレーが、「価値ある行為」と見なされ、仲間としての承認を高めてくれる規準となる。この点は社会共通の価値観が社会的承認の参照枠でもあるのと同じである。

しかし一方では、自分が属する小集団の価値観は、誰もが信じている価値観というわけではないこと、世の中には多様な価値観が存在することを、普通は誰もが知っている。そのため、自分が属する小集団の価値観への熱狂が冷め、関心が薄れると、その価値観に準じた行為に意味を見出すことができなくなる。それでも仲間の承認だけは維持したいため、そうした行為の価値を無意味に感じる反面、それ

をやめることができない。

たとえば営利目的の職場であれば、売り上げを伸ばせば評価され、承認を得ることはできるし、うまくいっている間はそれも楽しめる。だが一方では、そのような行為が職場以外ではさして評価されないことを知っているため、仕事があまくいかなければ、ただ営業成績を競う日々の生活に価値を見出すことがなくなる。しかし周囲の批判を怖れ、彼らの承認を維持するために、そうした行為をやめることができないのだ。〈B〉、学校の同級生や幼稚園の保護者どうしのような仲間関係においては、目的や価値観を共有して集まったわけではないため、より一層、承認を維持することだけが目的になりやすい。

承認を維持するための⑤化された空虚な行為という意味では、これは先に述べたシニシズムと同じだが、異なっている点は、もはや虚構としても社会共通の価値観は措定されず、そうした価値観を信じようとする自己欺瞞的な意識も存在しない、ということだろう。〈中略〉

それがすでに述べた「空虚な承認ゲーム」なのである。

「空虚な承認ゲーム」においては、自分の思うままに行動したい、感じたままに発言したい、という思いは、「⑦」という不安によって、ある程度までガマンせざるを得なくなる。そもそも愛情や信頼を感じている相手でない限り、過度の配慮や同調は負担だけでなく、自分の自然な感情を抑圧することで、自己不全感を招いてしまうだろう。

それは「承認」を過度に優先し、「自由」を必要以上に抑圧した結果とも言える。

もともと「自由への欲望」と「承認への欲望」の間には葛藤が起きやすい。たとえば、職場で自分のやりたい仕事があっても、上司や同僚に気を遣って断念したり、休日は寝ていたいと思っても、恋人の買い物や友人の遊びに付き合ったり、私たちは他者の承認を維持するために（「承認への欲望」を満たすために）、ある程度まで自由な行動を抑制する。逆に、相手の批判や軽蔑を怖れず、自分が思ったとおりに行動するなど、他者の承認よりも自由への欲望を優先させる場合もある。

一般的に、承認に対する不安が強い人間ほど、他者に承認されるためのカジョウな努力、不必要なまでの配慮と自己抑制によって、自由を犠牲にしていまいやすい。自分の自然な感情や考え（本当の自分）を抑圧し、「偽りの自分」を無理に演じてしまうのだ。その結果、心身ともに疲弊して病気になるってしまうケースも少なくない。

すでに述べたように、社会共通の価値観（＝大きな物語）への信頼が失墜したため、何をしたら承認されるのかわかりにくくなり、結果として承認不安が強くなっている。だが、「自由と承認の葛藤」という観点からもう一步踏み込んで考えると、そこには「自由な社会の到来」という、より大きな時代背景が見えてくる。

近代以前の西欧社会ではキリスト教の価値観が強い影響力を持っていたので、その価値観に反する行動はほとんど不可能であり、個人の自由は存在しなかった。△C△十八世紀以降、市民革命と資本主義の発展にもなって、個人が自由に生きる条件も次第に整いはじめた。といっても、「人間は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている」というルソーの言葉が示すように、最初はまだ伝統的価値観の影響力が強く、自由な行動には数多くの制約があった。伝統的価値観に反する行動は得られず、周囲の信用を失ってしまう危険性が高かったのだ。

ここに「自由と承認の葛藤」が生み出されたのであり、それはまず「個人と社会の葛藤」として現われ、「個人は社会に抑圧されている」といった世界像を生み出した。自由に生きる条件は確実に増大していたが、しかし自由への欲望が高まったことで、むしろ「社会によって自由が抑圧されている」と感じられやすくなったのである。

〈中略〉

現在では、社会の抑圧がそれほど強いわけではなく、自由に生きることを妨げる足枷はほとんど存在しない。科学の進歩と産業の発展、二度の世界大戦、マルクス主義の退潮、そして消費社会の到来によって、先進資本主義諸国においては伝統的価値観の影響力が弱くなり、多くの人が特定の考え方に縛られず、自由に生きられるようになっていく。

しかしその一方で、誰もが認めるような行為の規準が見えにくくなり、何をすれば他者に認めてもらえるのか、きわめて不透明な状況になったのも事実である。このため多くの人間は、自分の感情や思考を自由に表出すること、自由に行動することを抑制し、身近な人々の承認を維持するために、彼らに同調してしまいがち。自由と承認の葛藤は、いまや「個人の自由」と「社会の承認」の葛藤ではなく、「個人の自由」と「身近な人間の承認」の葛藤^⑨になっている。

いま、コミュニケーション能力が重要になり、「空虚な承認ゲーム」が蔓延^{まんえん}しているのは、社会共通の価値観を基盤とした「社会の承認」が不確実なものとなり、コミュニケーションを介した「身近な人間の承認」の重要性が増しているからなのだ。

（山竹伸二『認められたい』の正体 承認不安の時代）

問一 — ①とはどういうことか。

- 1 理想が先立って、実現不能な「生き方」が求められる
- 2 各自に求められる、振る舞いの「型」がある
- 3 社会の良くない面から目を背け、「幸せ」を強調する
- 4 「個人」が優先されて、家庭内での親睦がない

問二 — ②に入るのはどれか。

- 1 挿話
- 2 秘話
- 3 講話
- 4 寓話^{ぐう}

問三 — ③とはどういうことか。

- 1 自己の利益を最優先する姿勢
- 2 自然の欲求だけに従って生きる状態
- 3 価値観の共有を拒絶する姿勢
- 4 理念的な目標を見失っている状態

問四 — ④にあてはまる具体例はどれか。

- 1 図書館に趣味の本を入れてくれるよう申請する
- 2 差別や紛争をなくすために海外に留学する
- 3 志望校合格を目指して塾で切磋琢磨^{せつさたくま}する
- 4 トレーニングに打ち込んで立派な身体をつくる

問五 — ⑤に入る二字の語をこれより前の本文中から抜き出せ。

問六 — ⑥の意味はどれか。

- 1 だますこと
- 2 ほめること
- 3 あわれむこと
- 4 はげますこと

問七

⑦ に入るのはどれか。

- 1 うまく表現できずに自己嫌悪に陥りたくない
- 2 理解してくれない相手を責めてしまいそうだ
- 3 人と同じことを言っても無視されるだろう
- 4 本音を出したら嫌われるかもしれない

問八

⑧ に入る五字のことばを本文中から抜き出せ。

問九

⑨ではなぜ「ゲーム」というのか。

- 1 社会の発展に直接かわからない観念だから
- 2 支持や評価を得るためには戦略が必要だから
- 3 近代以降の社会には必ず勝者と敗者がいるから
- 4 相手とのかけ引きを楽しむ行為だから

問十

△ A ∨ ∽ △ C ∨ に入るのはそれぞれどれか。

- 1 ところが 2 まして 3 もっとも
- 4 また 5 あるいは 6 たしかに

問十一

|| a ∽ e のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

【二】次の文章を読み、後の問に答えよ。

一〇年ほど前にパスツール研究所の創立三〇周年記念ということで、フランス大使館から講演を頼まれた。私はもうボケているから、話の詳細は覚えていない。でもパスツールとファーブル^{注2}を並べて論じたことは記憶している。そうしたら講演の後で、大使館の人に「先生にはパスツールの話をしてくれと頼んだのに、ファーブルの話ばかりしてましたね」と言われてしまった。

パスツール研究所はあるけれども、ファーブル研究所はない。そういうことを考えると、私はコン畜生と怒りたくなるのだが、むしろその怒りに①性はない。フランス大使館も同情してはくれないであろう。パスツールは人類の役に立つたけれども、ファーブルは役に立っていないからである。

でも実は私は、それは全人類的な誤りだと思う。パスツール研究所があるなら、ファーブル研究所があつていい。むしろなくてはならない。そう言うべきであろう。②ファーブル研究所がないことが、全世界的に現代人の不幸を招いている。そう思うからである。

ファーブルは自分の目や耳、直接の感覚を通して、虫の世界、つまり自然を観照した。その結果、実に様々なことを発見した。突然だが、昨年台湾に行った。台東の近くの山中で、道の上でフンコロガシが糞を転がしていた。みごとに真球だった。カメラを携帯していたので、道に寝転がって、その写真を撮った。この採集旅行中に撮った写真は、それ一枚だけである。ファーブルもフンコロガシの写真を撮っていたと思う。だれだって撮りますよ、あれは。

現代人は感覚を通して世界を受け入れることをしない。そんなことはないよ。テレビを見たって、新聞を読んだって、ケータイだって、目や耳が働いてなければ、どうにもならないじゃないか。そういうことではない。いまでは目や耳から入れるものは情報だけである。その情報とはなにか。意味をもっていることである。情報は常に意味に直結している。意味に直結する感覚入力を情報と呼ぶのである。

台湾の山中で糞を転がしている虫に、どんな意味があるのか。断じてない。だからそれは情報にならない。でも虫はダンコ^aとして糞を転がす。そこでしょうが、問題は③フンコロガシは糞を転がすことによって、世界の、あるいは宇宙の、そして全存在の意味を問うている。現代のバカはそれがわからないから、虫を踏みつぶして終わる。

オフィスの中、マンションの部屋の中に、無意味なものがあるか。石ころがあるか。水たまりがあるか。草木が生え、根が張っているか。現代人はそういうものを徹底してハイジヨ^bする。そして「意味に囲まれて」生きる。だからそういう場所に絶対に出てきてはいけな
いものが発生する。それがたとえばゴキブリ。なぜ大の男が血相を変えて、あのどうでもいい虫を徹底的にハイジヨする行動に出るの
か。意味が不明だからであろう。ただいま、この瞬間、なぜゴキブリがここに出現しなければならぬのか。しかもあの姿形の意味がわ
からない。なぜ昔の番傘みたいな色なのだ。保護色だというなら、番傘と一緒に絶滅すればいいではないか。なぜやや扁平^{へんぺい}なのだ。あの
動きはどういう意味か。歩くつもりか、飛ぶつもりか。ああいうものを見せられると、現代人はサクラン^cする。あつてはならないもの
を、発見してしまったからである。そのサクランが、ゴキブリ退治という、徹底的にサクランした行動を引き起こす。

現代人は意味に包まれて生きるのを、暗黙のうちに当然としている。だから身の回りに無意味なものがないんでしようが。石ころの一
つも置いておけばいいではないか。机の上に石ころを置いて、存在の意義を考えなければならぬ時代になったのである。

④ だからバस्तールではなくて、ファール^{注3}なのである。でもフランス大使館の人はこんな文章は読まないであろう。それに現代のフラ
ンス人だって、もっぱら意味に包まれて生きているに違いない。

ファール^{注3}はダーウィンと意見が違っていた。それは有名だが、なぜそうなるのか。これには深い意味がある。私はそう思う。それに
はダーウィンの仕事とは、そもそもなんであったか、まずそれを考える必要がある。

一九世紀に生物学の分野で発見された三つの重要な法則がある。メンデルの遺伝に関する法則、ダーウィンの自然淘汰^d説、ヘッケルの
生物発生基本原則（反復説ともいう）である。これら三つの法則は、明らかに物理化学の法則ではない。じゃあ、なんなのだ。

どれも実は情報に関する法則である。メンデルは黄色いエンドウ豆をA、緑のエンドウ豆をaと書いた。遺伝子は両親から一つずつも
らうから、遺伝子型はAA、Aa、aaの三つになる。それをそれぞれ掛け合わせると、どうなるか。それだけの話である。そのど
立派な法則なんだ。単純な順列組合せじゃねーか。生意気さかりの中学生だった私はそう思った。でもそれは違う。中学生は中学生なの
である。メンデルの天才は、生物の形質が⑤化できることを示した。中学生の私は、そんなこと、夢にも気づかなかつたのである。

メンデルはエンドウ豆をアルファベットの集団に変えてしまった。これが情報化の基礎でなくて、なんであろうか。それまでは黄色いエ

ンドウ豆だったものが、Aになったんですよ、Aに。

念のためだが、一九世紀には「情報」という概念がない。一九五三年のワトソンとクリックのDNA二重らせんモデルの論文で、インフォメーションという言葉が正式に登場するのである。ところが生物から情報という概念を抜くことはできない。そのために、一九世紀の生物学者は、様々な苦勞をした。なぜなら当時の自然科学は物理化学中心であり、いふならば物理帝国主義だったから、情報なんてものがまさか生物の中心を占めているなんて、夢にも思わなかったからである。たとえばそこで生じたのが、生気論批判である。ハンス・ドリーシユは発生学者で、生気論者として知られている。米本昌平さんはドリーシユの本を翻訳して、要するに彼が言いたかったことは、今日の言葉でいえば「情報」だったとしている。生気論とは、生物には非生物にはない特別な力がある、というもので、私が教わった時代の生物学では、一八世紀以来の「時代遅れ」の考え方だとされていた。⁶ いまになればわかるが、話は逆である。一部の生気論者はセンク的に過ぎて、当時の科学者には理解されなかったのである。

さて次はダーウインの自然淘汰説である。私はここで名論卓説を論じているのだが、これが読者である皆さんの脳という環境に合わないと、直ちに自然淘汰されてしまう。逆に世間に流布する逸話というのは、どんどん尾ひれがついて、話が面白くなっていく。これでは、自然淘汰による生物の進化というのは、生物を情報として見れば、情報に関する経験則が出てきてしまうのは当然ではないですか。

〈中略〉

生物を情報として見なければ、自然淘汰はかからない。だから自然淘汰説には、様々な反論が生じてしまう。だからと言って、自然淘汰が成り立たないというわけではない。生きものを情報として見るかどうか、要は生物に対する見方の問題である。こういう理屈って、なかなか理解してもらえませんか。なぜなら科学者は結局は唯一絶対の客観的現実なるものを信じているからである。まさか「自分のもの見方」だなんて思っていない。唯一の客観的現実があるとしても、それを知っているのは、全知全能である唯一絶対神だけだから、⁸これは実は信仰だが、大方の科学者はそう思っていない。それは私のせいではない。

次はヘッケルの生物発生基本原則「個体発生は系統発生を要約して繰り返す」である。このくらい明瞭な情報的言明はない。だって、この法則そのものが学者の論文の書き方なんですからね。ある主題を研究するにあたって、当該の研究者は先人の業績、つまり系統発生を序文で「短く要約して繰り返す」。その後自分の所見を多少とも付け加える。それで学問がその分だけ進歩する。ホラ、それって進

化そのものでしょ。

こう考えてみれば、一九世紀の生物学の法則とは、情報学の経験則とでもいうべきものである。以前この話を『人間科学』という本に書いたら、池田清彦さんに「面白すぎる」と評されてしまった。でも私自身はこれで大過ないと思っただけである。

さてここで、パスツールとファーブルに戻る。パスツールは七つの大きな業績を上げている。そのいずれもが、同じパターンで問題を解決している。パスツールの場合、問題自体はあらかじめ与えられている。他人から何とかしてくれないかと頼まれたり、学界の懸賞問題だったりするのである。そこで彼はまず先人の業績を徹底的に集める。つまり情報を収集する。次に現場を観察する。そこで仮説を立て、その仮説の是非を決定する実験を行う。

科学にも、時代によって突飛な考え方があった。今日では進化論が大流行したが、当時流行っていたのは自然発生説であった。しかし、球形フラスコを、ある場合には消毒し、別のある場合には消毒をしないでおくなど、意図的に条件を変えて、単純明快かつ厳密な、素晴らしい実験を行なうことによってパスツールは、腐った物の中で化学変化が起きて生命が発生するという、愚かしい自然発生説を永久に葬り去ったのである。

——『完訳ファーブル昆虫記』第九巻下

ファーブルは出だしが違う。だれに頼まれたわけでもない。問題が虫の形をとって、向こうからやってくる。それを解決するやり方はパスツールに似ている。でも情報はほとんどない。問題を立てるところから始めて、すべてを自分でやってしまう。だれに頼まれたわけでもないから、他人の役には立たない。これが私は 10。

現在では科学は社会に取り込まれたものになった。自然から立ち上げて、答えを自然に返すような仕事はあまりない。公共のお金を使うから、仕方がないのである。つまらない世の中になりましたなあ。

(養老孟司『神は詳細に宿る』)

注1 パスツール（仏）：一九世紀の近代細菌学の祖。

注2 ファーブル（仏）：一九〇二〇世紀にかけての昆虫の行動学の祖。

注3 ダーウィン（英）：一九世紀の博物学者で進化論を説いた。

問一 ①に入るのはどれか。

- 1 再現
- 2 独自
- 3 一般
- 4 具体

問二 ②というのはなぜか。

- 1 情報として無益なものは無視されてしまうから
- 2 情報よりも感覚を優先してしまうようになるから
- 3 情報の積み重ねを当然だと考えてしまうから
- 4 既存の情報だけで世界を構成してしまいかねないから

問三 ③とはどういうことか。

- 1 フンコロガシにとってはその行為自体に生きる意義が込められているということ
- 2 フンコロガシの生息は世界の重要な一部であると訴えているということ
- 3 フンコロガシにはフンコロガシの知能に見合った哲学があると提示しているということ
- 4 フンコロガシにとって重要な行為が人間の理性を混乱させるということ

問四 ④というのはなぜか。次の文の（1）・（2）に入る語を本文中から抜き出せ。

意味のある（1）に主眼を置いたパスツールの姿勢よりも、一見無意味な事象を（2）したファーブルの姿勢のほうが今の世の中に必要だから。

問五 ⑤に入るのはどれか。

- 1 単純
- 2 記号
- 3 数値
- 4 合理

問六 — ⑥というのはなぜか。

- 1 物理学よりも情報学のほうが優れていることがわかったから
- 2 科学の世界にやつと情報という言葉が取り入れられたから
- 3 生物学は情報の集積で成り立つものだとされているから
- 4 生物学は情報学の一部であると規定されたから

問七 — ⑦の意味はどれか。

- 1 優れた学説
- 2 空虚な仮説
- 3 強引な仮説
- 4 真新しい学説

問八 — ⑧の「信仰」の対象はどれか。

- 1 唯一絶対の真実があるということ
- 2 自分のものの見方
- 3 生きものを情報として見るということ
- 4 全知全能である唯一絶対神

問九 — ⑨とはどういうことか。

- 1 科学は自然が実験の形をとって現れたものであるということ
- 2 観察者が真剣に自然を見つめていけば業績につながるということ
- 3 生物は大昔から変わらない姿のまま自然界に存在するということ
- 4 自然を凝視することで疑問を認識できるということ

問十 — ⑩に入るのはどれか。

- 1 とても気に入らないのである
- 2 実は大好きである
- 3 非常に悲しいのである
- 4 よくわからないのである

問十一 — a s e のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

【三】次の文章を読み、後の問に答えよ。

今は昔、丹後の国は北国にて、雪深く、風けわしくはべる山寺に、観音験じたまふ。そこに貧しき修行者籠りにけり。冬のことにて、高き山なれば、雪いと深し。これにより、おぼろげならずは人通ふべからず。この法師、糧絶へて日ごろ経るままに、食ふべき物なし。雪消えたらばこそ出でて乞食をもせめ、人を知りたらばこそ「訪へ」と言はめ、雪の中なれば、木草の葉だに食ふべき物もなし。五六日請ひ念ずれば、十日ばかりになりければ、力もなく、起き上がるべき心地もせず。寺の辰巳の隅に破れたる蓑うち敷きて、木もえ捨はねば、火もえ焚かず、寺は荒れたれば、風もたまらず、雪も障らず、いとわりなきに、つくづくと臥せり。物のみ欲しくて、経も読まれず、念仏だにせられず。ただ今を念じて、「今しばしありて、物は出で来なん、人は訪ひてん」と思はばこそあらめ、心細き事限りなし。今は死ぬるを限りにて、心細きままに、「この寺の観音、頼みてこそは、かかる雪の下、山の中にも臥せれ、ただひとたび声を高くして「南無観音」と申すに、もろもろの願ひみな満ちぬることなり。年ごろ仏を頼み奉りて、この身いと悲し。日ごろ観音に心ざしを一つにして頼み奉るしるしに、今は死にはべりなんす。同じき死にを、仏を頼み奉りたらむばかりには、終わりをもちたしかに乱れずとりもやするとて、この世には、今さらにはかばかしき事あらじとは思ひながら、かくし歩きはべり。などか助けたまはざらん。高き位を求め、重き宝を求めばこそあらめ、ただ今日食べて、命生くばかりの物を求めて賜べ」と申す程に、戌亥の隅の荒れたるに、狼に追はれたる鹿入り来て、倒れて死ぬ。

ここにこの法師、「観音の賜びたるなむめり」と、「食ひやせまし」と思へども、「年ごろ仏を頼みて行ふこと、やうやう年積もりにたり。いかでかこれにはかに食はん。聞けば、生き物みな前の世の父母なり。我物欲しといひながら、親の肉を屠りて食はん。物の肉を食ふ人は、仏の種を絶ちて、地獄に入る道なり。よろづの鳥けだ物も、見ては逃げ走り、怖ぢ騒ぐ。菩薩も遠ざかりたまふべし」と思へども、この世の人の悲しきことは、後の罪もおぼえず、ただ今生きたる程の堪へがたさに堪へかねて、刀を抜きて、⑦の肉を切り取りて、鍋に入れて煮食ひつ。その味はひの甘きこと限りなし。

さて、物の欲しさも失せぬ。力も付きて人心地おほゆ。「あさましきわざをもしつるかな」と思ひて、泣く泣くゐたる程に、人々あまた来る音す。聞けば、「この寺に籠りたりし聖はいかになりたまひにけん。人通ひたる跡もなし。参り物もあらじ。人気なきは、もし死

にたまひにけるか」と、口々に言ふ音す。「この肉を食ひたる跡をいかでひき隠さん」など思へど、すべき方なし。「まだ食ひ残して鍋にあるも見苦し」など思ふ程に、人々入り来ぬ。

「いかにしてか日ごろおはしつる」など、廻りを見れば、鍋に檜ひのきの切れを入れて煮食ひたり。「これは、食ひ物なしといひながら、木をいかなる人か食ふ」と言ひて、いみじくあはれがるに、人々仏を見奉れば、左右の股を新しく彫り取りたり。「これは、この聖の食ひたるなり」とて、「いとあさましきわざしたまへる聖かな。同じ木を切り食ふ物ならば、柱をも割り食ひてんものを。など仏を損ひたまひけん」と言ふ。驚きて、この聖見奉れば、人々言ふがごとし。「さは、ありつる鹿は仏の験じたまへるにこそありけれ」と思ひて、ありつるやうを人々に語れば、あはれがり悲しみあひたりける程に、法師、泣く泣く仏の御前に参りて申す。「もし仏のしたまへることならば、もとの様にならせたまひね」と返す返す申しければ、人々見る前に、もとの様になり満ちにけり。

されば、この寺をば成合と申しはべるなり。観音の御しるし、これのみにおはしませず。

〔『古本説話集』五三「丹後国成合事」〕

問一 — ①からわかることはどれか。

- 1 法師が人間不信であったこと
- 2 法師の信仰心が非常に篤かったこと
- 3 法師が念入りに山籠もりの準備をしたこと
- 4 法師には道に詳しい知人がいること

問二 — ② i a、bの意味はそれぞれどれか。

- 1 嘆く
- 2 考える
- 3 祈る
- 4 堪える
- 5 悩む

問三 — ③の意味はどれか。

- 1 もう少し経っても、食べ物もなく人も訪れないだろう
- 2 もう少し経ったら食べ物も手に入り、人も訪れるだろう
- 3 もう少し経つと食べ物は手に入るが、人は訪れないだろう
- 4 もう少し経てば、食べ物はないままでも人は訪れるだろう

問四 — ④と感じているのはなぜか。

- 1 私欲を満たそうとした罰で今にも死にそうになっているから
- 2 今まで信じていた仏が無力だとわかってしまったから
- 3 人を顧みず修行に励んだ結果、孤独になってしまったから
- 4 熱心に仕えてきた仏に見捨てられようとしているから

問五 — ⑤の意味はどれか。

- 1 少しも頼りになることはないだろう
- 2 確実なことは言えないはずだ
- 3 これ以上ばかばかしいことはあるまい
- 4 順調であつてほしくはない

問六 — ⑥とはどういうことか。

- 1 肉を食べる人は菩薩に叱責されるということ
- 2 地獄の道は菩薩さえ近寄らないほど恐ろしいということ
- 3 菩薩は肉を食べる人を永久に見捨てるということ
- 4 人間が菩薩さえ近寄らないほど醜悪な姿になるということ

問七 ⑦ に入る四字のことばをこれより後の本文中から抜き出せ。

問八 — ⑧はなぜか。

- 1 正気になって仏の肉を食べることの恐れ多さに気づいたから
- 2 肉を食べたらいつそう欲が抑えられなくなってしまったから
- 3 罪あることだとわかりつつ誘惑に負けて肉を食べてしまったから
- 4 自らを犠牲にして肉を与えてくれた仏の慈悲深さに感動したから

問九 — ⑨はなぜか。

- 1 修行者の苦しい状況に同情したから
- 2 修行を成し遂げた修行者に感心したから
- 3 仏の慈悲に心を打たれたから
- 4 嘘をつく修行者があわれだったから

問十 本文の内容に合うものはどれか。

- 1 修行者は二週間以上山寺に籠もって修行をしていた
- 2 人々は生き物の肉を食べた修行者を軽蔑した
- 3 鹿は修行者が寝ているそばで倒れて死んでしまった
- 4 地位や宝を手に入れたという願いは叶わなかった
- 5 修行者は鹿の正体にすぐ気づくことができなかった